の表面が球面である場合にどれだけ今の議論に差が表はれてくるかと云ふことは、ジーンス氏の論文を參照して居る。それに依れば今迄の結論は大しての違ひはなく、少しの違ひは寧ろ深さはより淺かるべき傾向であることを示して來る。

又實驗的には、ターナー氏の對極附近に於ける觀測からだしてる深さの一部、或ひはリンチ氏のカラブリアンの地震から出して居る深さなど四十粁から六十粁の所を示して居て、此の結論とよくあつて居ると見られる。

即ちこの論文は地震記象を見て理論的考察から震源の深さは百粁以内と斷言して居る。

(S. K. Banerji; On the Depth of Eartnquake Focus, Phil. Mag. Jan. 1925)

雜報

◎**彦根測候所の新强震計**　同測候所にては豫て檢定出願中の大森式强震計（倍率一倍半）既に檢定を了して同所へ回送したれば、之れも同所の地震觀測に新なる威力を加へたりと云ふ可し。

◎**山陰道但馬附近の地震**　大正十四年五月二十三日十一時十分頃山陰道但馬の北方海底に烈震あり有感覺區域は關東地方九州北部に互る廣汎なる區域にして、震央は豊岡の北方約十粁程の海底に存するものの如く、豊岡、城崎兩町及び津居山村は火災の爲め再び關東大震の如き慘狀を呈したり。